

令和 4 年 6 月 17 日現在

機関番号：32683

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00297

研究課題名（和文）1910～30年代の文化メディアにおける日中相互表象の形成と展開

研究課題名（英文）The Formation and the development of mutual symbol in the cultural media of Japan and China from 1910 to 1930s.

研究代表者

篠崎 美生子（SHINOZAKI, MIOKO）

明治学院大学・教養教育センター・教授

研究者番号：40386793

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：1910年代から1930年代にかけての、日本人の中国に対する意識および、中国人の日本に対する意識を明らかにした。1910年代初頭に学生時代の芥川龍之介が記した戯曲「西廂記」に関する聴講ノート、1930年代から40年代前半にかけて上海で暮らした林京子の小説のほか、当時の中国語速習本などから一般市民が当時抱いた中国イメージも検証した。また、中国人の日本表象は、『宇宙風』等に掲載された文章のほか戯曲の演出なども視野にいれて検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1910年代から30年代は、日本の中国侵略によって両国間の対立があらわになった時代であるとともに、数多くの両国市民が日常的に交流するようになった時期でもある。この時期に、日中市民がそれぞれ相手国にどのようなイメージを抱いたかを、文学はもちろん、その他幅広いメディアを通じて明らかにしようとした点に、本研究の最も大きな意義がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to compare Japanese writers' awareness of China to Chinese writers' awareness of Japan from 1910 to 1930. We clarified the Japanese intellectual's awareness of China at that time through the reprinting of Akutagawa Ryunosuke's note of the lectures on the play Xixiangji and we explored the Japanese common people's images of China through investigating the example sentences of Chinese textbooks of the time. We also clarified the awareness of Chinese of the same age through the writings on Japan and the plays which dealt with Japan.

研究分野：日本近現代文学

キーワード：中国 日本 表象 芥川龍之介 戯劇

1. 研究開始当初の背景

本研究を計画、開始した2017~18年ころ、日本近代文学のテキストにおける「中国」、特に1930~40年代の「上海」のさまざまな表象についての研究が非常に活性化していた。『大陸新報』(1939~)等の現地邦字メディアの研究や、そうしたメディアをひとつの場とした現地日本人の交流についての研究も、その当時飛躍的な進展を見せた(大橋毅彦『昭和文学の上海体験』2017、陳童君『堀田善衛の敗戦後文学論 「中国」表象と戦後日本』2017)。しかし、個別の文学テキストや作家を越えて、一般の日本人に共有された「中国」表象についての研究は、まだ成っているとは言えなかった。まして、中国人による「日本」表象と対照させながら、時代の言説を立体的に見出す研究は、まだ緒に就いたばかりであった(張競・村田雄二郎編『日中の120年文芸・評論作品選』2016)。

なお、本研究グループのうち、研究代表者の篠崎美生子、研究分担者の庄司達也、田中靖彦は、「20世紀初頭における「中国」表象の受容・形成・展開についての総合的研究」(基盤C・15k02275)に関わり、芥川龍之介のケースをひとつのモデルとしながら、1910年代から20年代の日本の知識人がどのように「中国」表象を受容、形成し、どのように発信、再生産しようとしたかを検証した。この研究によって、当時の日本の「文学」「教育」が、いかに「中国」表象の形成に大きな影響を与えたかは明らかにすることができた。しかし、一方で、「表象」研究を知識人に限定して行うことの限界を感じたほか、日本人による「中国」表象が中国人による「日本」表象と不即不離の関係にあることも痛感していた。

2. 研究の目的

1.の事情から、時代の総体を捉えるためには、広く一般市民に向けて発信され、共有された言説の分析と、日中で相互に形成された相手国(民)の表象に対する両面からのアプローチが必須であることを認識し、本研究では、知識人に限定されない日中市民による相互表象の対照を、研究課題の核心に置くことにした。つまり、1910年代から30年代にかけて日本人が抱いた「中国」表象と、中国人が抱いた「日本」表象を、「文学」「演劇」「教育」を中心とした広義の文化メディアを主な対象として分析・解明することを目的とする。両国関係が悪化の一途を辿ったとされる当時を、両国の市民が最も接近した一種のグローバリズム時代としてとらえ、当時の日中両市民が相互にどのような表象を抱き、それがどのように変化したかを分析することを目的として研究を開始した。

3. 研究の方法

(1)2017年度まで続けてきた「芥川龍之介聴講ノート「支那戯曲講義 塩谷温助教授」(山梨県立文学館)の翻刻、解説作業を進めることで、1910年代前半に東京帝国大学でどのような「中国」の表象が若い学生に伝えられていたかをあきらかにしようとした。これは、日中の「一般市民」が相互に抱いた表象と対照させるためである。また、芥川以外の塩谷の受講生が所持していたと考えられる「西廂記」のテキストを入手し、書き込みなどを比較することで、東京帝国大学生の間にも、中国文化への理解、漢詩文リテラシーに差異があったことを見極めようとした。

(2)1910~30年代における中国(古典)戯劇の上演を介し、中国の一般市民がどのように同時代の政治状況をイメージしようとしていたかをあきらかにしようとした。

(3)高等教育によって漢詩文教育を受ける機会を持たなかった日本の一般市民が、1910~30年代に中国に旅行、定住のために渡航する際に利用した会話速習本を検証し、その例文を通じて、当時の中国(人)表象を分析しようとした。

(4)『大阪毎日新聞』と上海の伝統紙『申報』の比較分析を行い、両者が互いの記事を参照し合いながらどのように相互の表象を紡いでいったかを検証しようとした。このほか、可能な範囲で、中国誌『宇宙風』も参照することにした。

(5)上海および愛知同文書院記念館(愛知大学内)での現地調査を経て、日中バイリンガル(または日中英トリリンガル)を養成しようとした東亜同文書院(上海~1945年)での教育内容と、卒業生が日中両国に及ぼした影響について調査しようとした。

(6)研究協力者の力を借りて、可能な範囲で、「湾生」作家と台湾における「日本」表象、「中国」表象をあきらかにしようとした。

4. 研究成果

- (1)については、コロナ禍以降もオンライン研究会を重ねて翻刻作業を進めたが、残念ながら未完である。今後、元曲(「西廂記」ほか、中国元代に成立した戯曲)の専門家の教示も仰ぎ、より完成度の高い翻刻・解説をめざしつつあるところである。芥川と同時期の受講生が所持していたと考えられる「西廂記」のテキストは研究分担者の庄司達也が発見し、研究会で検証を実施した。芥川との間に大きなテラシーの差があることが確認できたが、その詳細は、「芥川龍之介聴講ノート」支那戯曲講義 塩谷温助教授」翻刻完了に伴う書籍出版時まで見送る予定である。
- (2) 1910~30年代における中国(古典)戯劇の上演を介しての言説生産に関しては、主に研究分担者の田中靖彦によって活字論文の形で発表された。
- (3) 会話速習本の検証は、主に研究代表者篠崎美生子が担当、北京語、上海語、もしくは軍用の速習本が多数発売されていたことがわかったほか、その例文に、強烈な差別意識、植民地主義が表れていることもあきらかになった。
- (4) 『大阪毎日新聞』は『申報』との比較分析までには、残念ながら手が及ばなかった。ただし、『宇宙風』は「日本与日本人特輯」(1936.2,10)等を参照し、当時の日本の侵略に対し、日本留学経験者でもあった中国人執筆者たちがいかに強い危機感と絶望感を抱いたか、同時代の日本人との間にどれほど大きな意識の懸隔があったかを見ることができた。
- (5) コロナ禍のために上海および愛知同文書院記念館等での現地調査は、残念ながらすべてとりやめとなった。
- (6) 「湾生」作家関連の研究も、実施できなかった。

今回の研究は、コロナ禍の影響、研究メンバーの校務、病気等の事情によって、計画通りに進まなかった点が複数あること、きわめて遺憾である。ただ、現地研究や対面での研究会実施が行えなかった代わりに、個人単位での研究(論文等)に進展があったほか、オンラインでの公開講演会とその成果報告書刊行という成果を挙げることもできた。

(7) 2020年3月1日に、明治学院大学教養教育センター附属研究所「林京子と上海」研究会との共催で、オンライン講演会「上海をめぐる三つの透視図 「著述業」者・林京子の移動視点」(講演講師：島村輝氏、コメンテーター：秦剛氏)を開催。当日は、中国・アメリカ・日本の3国から75名の参加者を得ることができた。1930年代(から40年代にかけて)、少女時代を上海で過ごした林京子が、その経験を、けっしてありのままではなくどのように表象していったのかについて、またそれを今日の読者がどのように受け取るのかについて、活発な議論が展開された。後日、この講演と議論に論文を加え、報告書として『上海を舞台に 林京子/芥川龍之介』(2022.2)およびその中国語訳版『以上海為舞台 林京子/芥川龍之介』(2022.3)を刊行した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 篠崎美生子	4. 巻 52
2. 論文標題 三・一独立運動、五・四運動百年—二〇一九年秋季韓国大会報告 ソウル大会を終えて—感謝と希望と—	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会文学	6. 最初と最後の頁 2-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 庄司達也	4. 巻 136
2. 論文標題 二字の伏せ字 戦時下での或る編集者の仕事	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国文学言語と文芸	6. 最初と最後の頁 89-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田中靖彦・石井仁	4. 巻 99
2. 論文標題 篇常『續後漢記』昭烈皇帝紀についての覚書	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 実践国文学	6. 最初と最後の頁 30-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 庄司達也	4. 巻 55
2. 論文標題 芥川龍之介と大阪毎日新聞社—一九二四年一月「誠職事件」考—	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 湘南文学	6. 最初と最後の頁 83-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 庄司達也	4. 巻 12
2. 論文標題 「『支那遊記』をとりまく時代」の可能性	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 芥川龍之介研究	6. 最初と最後の頁 100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 楊志輝	4. 巻 12
2. 論文標題 中国ナショナリズムの勃興と日本の大陸拡張	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 芥川龍之介研究	6. 最初と最後の頁 101-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中靖彦	4. 巻 12
2. 論文標題 芥川訪中期の「活孟徳」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 芥川龍之介研究	6. 最初と最後の頁 115-130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 篠崎美生子	4. 巻 12
2. 論文標題 「日支親善」の蹉跌とジェンダーバイアスー梅蘭芳訪日公演をてがかりにー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 芥川龍之介研究	6. 最初と最後の頁 130-136
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中靖彦	4. 巻 100
2. 論文標題 蕭常『續後漢書』諸葛亮傳贊について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 實踐國文學	6. 最初と最後の頁 114-138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 篠崎美生子	4. 巻 194
2. 論文標題 「帝国」の語りとしての「山月記」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国文学研究	6. 最初と最後の頁 75-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中靖彦	4. 巻 41
2. 論文標題 蕭常『續後漢書』帝紀および列傳一の贊について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 実践女子大学文芸資料研究所年報	6. 最初と最後の頁 195-212
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件(うち招待講演 1件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 庄司達也
2. 発表標題 芥川龍之介「伝」・「年譜」考一太宰治、ストラヴィンスキー、モーパッサンに関する「記述」をめぐる課題一
3. 学会等名 国際芥川龍之介学会(国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 篠崎美生子
2. 発表標題 「陰翳礼讃」 - 「われわれ」とはだれか -
3. 学会等名 《谷崎潤一郎中国題材作品研究》国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 庄司達也
2. 発表標題 教養としての漢詩 島崎藤村「小諸なる古城のほとり」をめぐって
3. 学会等名 《中国文化与日本文学》シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 篠崎美生子
2. 発表標題 記号としての「魯迅」と「芥川」 林京子のポジションについて
3. 学会等名 《中国文化与日本文化》シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 庄司達也
2. 発表標題 久米正雄の好奇心 ラジオ・ダンス・映画
3. 学会等名 こおりやま文学の森資料館 文学に親しむイベント「文学講座」（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 庄司達也
2. 発表標題 「大阪毎日新聞社と菊池寛」補説
3. 学会等名 国文学言語と文芸の会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 王書イ(王へん+章)編著 篠崎美生子ほか著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 三恵社	5. 総ページ数 95
3. 書名 日本近代知識人が見た北京(日本近代文学と北京-「未発の可能性」を探して-)	

1. 著者名 施小イ(火へん+章)編 篠崎美生子ほか著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 華東理工大学出版社有限公司	5. 総ページ数 215
3. 書名 谷崎潤一郎中国題材作品研究(「陰翳礼讃」-「われわれ」とは誰か-)	

1. 著者名 彭春陽、二平道明編 庄司達也ほか著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 国立台湾大学	5. 総ページ数 368
3. 書名 日本文学研究叢書35 芥川龍之介研究 台湾から世界へ	

1. 著者名 三国志学会監修	4. 発行年 2019年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 224
3. 書名 曹操 奸雄に秘められた「時代の変革者」の実像	

1. 著者名 田中靖彦ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 青土社	5. 総ページ数 229
3. 書名 ユリイカ 特集「三国志」の世界（陳寿と習鑿齒 ある皇帝の死と歴史記述）	

1. 著者名 「林京子と上海」研究会 / 中国表象研究会	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明治学院大学 教養教育センター附属研究所	5. 総ページ数 48
3. 書名 上海を舞台に 林京子 / 芥川龍之介	

1. 著者名 「林京子与上海」研究会 / 中国表象研究会	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明治学院大学 教養教育センター附属研究所	5. 総ページ数 33
3. 書名 以上海為舞台 林京子 / 芥川龍之介	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田中 靖彦 (TANAKA Yasuhiko) (40449111)	実践女子大学・文学部・准教授 (32618)	
研究分担者	庄司 達也 (SHOJI Tatsuya) (60275998)	横浜市立大学・国際教養学部(教養学系)・教授 (22701)	
研究分担者	楊 志輝 (YANG Zhihui) (60367141)	恵泉学園大学・人間社会学部・教授 (32694)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	林 ハイ(女ヘン+凧)君 (LIN Peijun)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			